観光と食文化

大村喬一*
堤博美*

要旨

奈良に美味な飲食店が少ないのは、多分大仏商法といわれる心理的な条件が作用しているのかも知れない。即ち奈良には日本一の大仏があり、黙っていても多くの人々が奈良を訪れるのだから、格別美味なものを提供して、人を惹きつける必要はないと考えているのであろう。しかし伝統を重んじ郷土に誇りをもつ奈良人が、美食の伝統を捨て去ったとは思えず、我々としては今後も美味を求めて、いろいろな店を探訪していくつもりである。

一　奈良食べ歩き

「美味しい店を教えて下さい」。奈良に来て六年、私は、いろいろな人に、この質問を投げ続けている。残念なことに、この質問に対する定番の答えは、「いや、奈良にはそんな店はありませんね」というものだ。日本が統一されて始めて開かれた都であるのに、そんな筈はないと考えながら、私は凝りもせず、この質問を繰り返している。事実奈良にある種々な遺跡から出土した木簡を見れば、全国からいろいろな材料が送られ、宮廷人の口を楽しませたであろうことは疑いを入れない。伝統を重んじ郷土に誇りをもつ奈良人が、安易に美食の伝統を捨て去ったとも考えにくい。それとも、美食の伝統は遷都の際、そのまま京都に移り去って、そこで花咲かせたのだろうか。橿原にある今井町の江戸時代の繁栄を見れば、この様な伝統が遷都を機に消失したとも言い難いように思われる。その点を問いただすと、答えは二つに分類される。一つは、奈良は盆地であるので仲々美味な魚を入手するのが困難であること、奈良人は外食を余りしない、というものである。確かに新鮮な魚を入手し難いのは判るが、これ程輸送ネットワークが発達した現代であれば、産地直送は決して難しいわけではないことのほか、ちょっと時間をかければ隣の大阪で仕入れすることは容易であろう。大阪に幾つもある魚市場・野菜市場その他の食品市場からどんな食材でも入手することは可能である。また、家庭で素晴らしい食事が用意されているのなら、外食産業のレベルも上がらざるを得ず、どうもこの説明でも納得できるものとは言い難い。もう一つの答えは、

平成12年9月29日受理　*教養部

俗に大仏商法というものである。即ち東大寺の銅造盧遮那仏坐像は日本一の大仏であり、日本人に生まれた以上は、必ず一度は奈良を訪れて礼拝すると想定されるから、黙っていても一億の参詣者があり、奈良にある飲食店は格別美味なものを提供して、人を惹きつける必要はないとするものである。この説明は妙に納得的なところがある。言われて見ると、その通りかもしれない。他方そのような態度であるからこそ、奈良に永逗留する観光客が、昔に比べ非常に少なくなったのではないだろうか。修学旅行の学生達も奈良に滞在するより、京都に二泊、三泊しその間を縫って奈良観光をし、四、五時間逗留すると直ぐ京都に戻ることが大多数を占めると聞く。勿論これは食事の質よりも他の要因が絡んでいることも大きいだろうが、夕暮れの静けさの中で落葉を踏みしめながら、雄大な奈良公園の中を散歩する機会を奪われてしまうのは実に悲しいことでもある。勿論奈良には誰もが知っている有名なレストランが幾つかある。月日亭（奈良市春日野町一五八）、百楽荘（奈良市百楽園三―一―三）は何れも景観が素晴らしく、また由緒ある奈良ホテル（奈良市高畑町一〇九六）、菊水楼（奈良市高畑町菩提一一三〇）も見逃すわけにはいかない。しかしこれらのレストランや料亭は少々お値段もお高く、気軽に訪れるというわけにもいかない。出来ればもうちょっと気軽に入れる店が是非とも必要である。私見によれば美味いものを食わせようとすれば、愛情がなければならない。例えばナマスは機械切りでは美味しくない。包丁で切って始めて歯ざわりがよくなり、所謂オフクロの味が出てくる。オフクロの味といわれるのは、姿・形にあまりとらわれず味を重視することから始まる。中国料理もフランス料理も素材三割、腕七割と言われるが、日本料理はこの逆で、素材七割、腕三割となるそうである。何れにしてもシェフの包丁さばきが重要であることに間違いないが、その腕はいろいろな味を知ることによって磨かれるのではないかと思う。従って食べ歩きをしないシェフの店は、長い目で見れば決して素晴らしい店としての名声を保つことが難しかろうと思う。勿論シェフの腕はうまい店の重要な要素であるが、お客にとってもう一つ、シェフの腕と同じ位に重要なのはサービスの質でもある。マニュアル通りの通り一遍のサービスで満足するお客は決して多くはない。ファーストフードの店や、ファミリーレストランではいざ知らず、ゆっくりくつろぎながら一杯を呑み、味のよい料理に舌づつみを打ちたいお客にとって、サービスは重要な要素である。何しろ気難しい人間相手に熟達するのは、機械の熟練工になるよりは一層困難な作業である。ここは矢張り貫録のあるそして他の従業員にニラミをきかすことのできる熟年の女性の存在が不可欠である。品切れになったメニューの中の一品を注文した時、表情も変えず「それはもう品切れです」と言ったまま黙って立ち続ける従業員の顔を見ているより、言葉巧みに別の一品をすすめる女性がいる方が遥かに好ましい。いやお客にとっては、その方が遥かに重要だとも言える位なのである。感じのいい店というのは、表（サービス）と裏（コック）が一体となった店を言うのではないだろうか。この様な観点に立って、私達は奈良のいろいろな店を探訪した。その

数は優に百数十に昇る。しかしまだ極め尽くしたとは到底言い難い。これからもめげずに探訪し続けるつもりである。

二　古代食を味わう

古都奈良に住むグルメ人と称する人々の一人としては、まず何よりも古代飛鳥の人々がどのようなものを食べていたのか知らずして食を語ることは出来ない。早速飛鳥保存財団が「万葉あすか葉盛御膳」を味わう会を開くと知って、取り急ぎ駆けつけることにした。当日明日香村の研修宿泊所に全国から集まった人々は四十五名。この古代食は昭和六十年に伝承料理研究家の奥村彪生氏が指導して今回で十四回目ということである。古代食の構成は藤原京の遺跡から出土した木簡を基に多少の想像を加えて再現したものだそうである。

万葉あすか葉盛御膳　献立

酒　にごり酒
飯　赤米・黒米（餅米）
炙　鴨の串焼
和え物　椎茸の雲丹あえ、貝柱の塩辛あえ
羹　ふくろ松茸、牛蒡のすまし
膾　備前くらげ二杯酢、もづくの酢漬
煮物　火干しの子持鮎醤煮、とこ鮑
茹物　山芋と百合根の茶巾しぼり、里芋の練味噌かけ、花韮ごまかけ
須々保里　高菜漬
菓子　蘇、焼栗、山桃、巻柿、黒いちじく、蓮の実

赤米は普通の白米に比べて少々堅いが、よく噛めば仲々味がよく、甘みがある。そのほかの味は夫々現代風にアレンジされていることもあり、何等違和感がなく、美味しく食べられるが、何といっても、その性格上混ぜ物がなく素朴な味わいは健康食として最適であろう。菓子の部にある蘇は奈良時代唯一の酪農食品で、牛乳を数時間煮詰めた結晶で、まさに古代のチーズであるが、味は現代人の好みに合わせてあり、昔のそれとは必ずしも一致しないとのことである。朱塗りの木皿に濁り酒を注いで味わえば、「醤酢に蒜つきあてて鯛願ふ吾にな見えそ水葱の羹」という万葉集の一首が憶い出され、万葉人もグルメであったことを実感できるのである。

古代食を味わったと云うためには、僅か一度の「あすか葉盛御膳」だけでは勿論充分とは云えない。奈良パークホテルでも「天平の宴」と題して古代ヘルシー料理を提供していると聞き及び早速訪れることにした。こちらも魏志倭人伝や記紀などに残された食の文献と、平城京跡から出土した諸々の器、木簡等に淵源を求め再現した古代食である。献立はこちらの方が豪華で、蛤・川ます・猪肉などがあった。デザートには唐菓子と記され、和菓子の原点とも書いてある。小麦粉に胡麻を入れて練り上げ、胡麻油で揚げたもの。案内された部屋には、

金屏風が立てられ、赤い毛氈が敷かれ、座布団の上に胡服の上衣が用意されてある。お客はそれをはおり、越天楽の音楽に耳を傾け、灯心台の灯りに照らされながら古代の健康自然食を味わう趣向である。パークホテル企画室の菅原氏の古代食に関するウンチクに感心しながら、胡服をまとった若く美しい女性に天平の白酒を注いでもらえば、世俗の慌ただしさは彼方に去り、「この御酒を醸みけむ人は　その鼓臼に立てて　歌いつつ　醸みけれかも　舞いつつ　醸みけれかもこの御酒のあやにうた楽し　ささ」という古事記歌謡を憶い浮かべながら陶然とした気分になるのである。

世界の諸民族の中にはアルコール飲料を飲まない民族もあるが、飲む方が多い。魏志倭人伝に飲酒については二ヶ所でふれられており、一つは服喪期間中で、集まった人々が歌舞・飲酒するとあり、もう一つは集会にあたって男女の区別なく飲酒するとある。これを見ると、我が日本人は昔から相当酒好きだったらしい。私の考えでは、これは決して悪いことではなく、酒好きな民族は決まって美味な食事を作り出す。料理と云えばフランス料理、中国料理とならんで日本料理は世界三大料理の一つとなっている。事実私の二十六年余に及ぶ外国生活でも、我が家の日本料理は外交官や任地高官の最も評価された料理の一つであった。しかし最近の傾向として、化学調味料、防腐剤、着色料などの進歩によって日本料理特有の素材の持ち味を生かした味が評価されないウラミがある。このまま行けば、先祖伝来、とぎすまされて来たデリケートな日本人の舌も鈍ってしまうのではないだろうか。偶には私達も古代食を味わい、その素朴な味に舌鼓をうって、デリケートな舌を鍛え直すことも必要であろう。（以上文責　大村喬一）

三　そぞろ歩きと口福

季節は四月半ば、時はおだやかな気持ちのいい春の夕暮れ。近鉄西大寺駅の北口で待ち合わせたのは、自称食通の三人。三人の共通の目的は、「歩く・食べる・楽しむ」を実践し、美味の真を追求すること。してこの日の目当てはいずこなるや。大村先生の先導で誘われた場所は、奈良市三条町三丁目。分かりやすく言えば、近鉄奈良線と橿原線の分岐点の秋篠川の東岸、「奈良・西の京・斑鳩自転車道」である。この自転車道は秋篠川の東側の堤防の上に作られた幅二メートル余の舗装路である。もちろん車両の通行は禁止、歩行者と自転車専用だ。この出発点からは唐招提寺まで二・二キロ、薬師寺まで二・八キロ、平城宮跡まで〇・四キロ、と路傍の標示板に書いてある。

「ここは奈良市の歴史の道の一環でね、三笠山の麓から春日大社、二月堂、東大寺、般若寺と北上して、佐保、佐紀の古墳群から御陵を経て、平城宮跡を通り、ここから南下して斑鳩の法隆寺に通ずる道なんだ」と大村先生。

なるほどこれは散歩には打ってつけの場所だ。右手に秋篠川、左手に釣堀池、その向こうに朱雀門。その彼方に小さく見える東大寺、そして若草山、春日山、高円山と連なる。自転車道の左側には、何種類かの桜の木が一定の間隔で植えられている。山桜や染井吉野はそろそ

ろ花が散って葉桜に向かう頃合いだが、八重桜はまだ咲き初めたばかりである。所々に紫紅の蘇芳の花が満開だ。左右の土手には点々と菜の花が咲き乱れ、また路傍には色々な野草や小さな花々が今を盛りと繁茂している。ところが、それらと裏腹に、コンクリートで護岸工事をした秋篠川の水はあまり綺麗ではない。生活排水が流れ込むからであろう。それでも所々よく見ると、水中に鯉らしい大きな魚が泳いでいる。水面には鴨などの水鳥も何羽か見かける。将来、生活汚水や下水の処理施設が普及すれば、この川ももっと浄化されて、生息する魚の種類も次第に増え、やがて水鳥達の恰好の憩いの場所となるだろう。その時にはこの道はきっと、奈良の貴重な散策コースとなることだろう。

五百メートル程南下して阪奈道路を横断、さらに少し下って道路を拡幅中の三条通りを横切った。三人はそぞろ歩きながら、折からの黄昏時の景色を楽しむ。夕日がようやく西に傾き、大気がやや肌寒くなってきた。ヤッケを着込んできて正解だった。路傍の草花も夕闇に包まれ始めて、文目も分からなくなった。やがて右手前方に、こんもりとした黒い森陰が現れた。唐招提寺だ。その手前で護岸工事のために自転車道は遮断されている。唐招提寺の東門前の小橋を渡り、秋篠川の西の堤防の上を歩く。折しも自転車に乗った二人の中年婦人とすれ違った。顔見知りなのか、その一人の女性が自転車を停め、大村先生に挨拶をした。しばし言葉を交わしてから、再び自転車に乗り、連れの人と北へと走り去る。まだこちらに来られてさして長くないのに、大村先生の顔の広さには驚く。思うに、その多彩な前歴と人徳のしからしむる所以であろう。

しばらくして「下極楽橋」を東に渡り、再び左岸の自転車道をそぞろ歩く。反対側からやってきた灰白色の小犬を連れた頭の禿げた老人と出会う。小犬はポメラニアンかシーズか、はたまた狆か、名前はしかとはわからない。東山先生が咄嗟に、「まあ、可愛い」と嘆声をもらした。確かに何とも名状しがたい愛嬌のある表情をしている。三人の褒め言葉に、飼い主の老人は相好を崩しながら立ち止まった。東山先生はその場に屈み込んで、子犬の頭や喉や背中を撫でまわす。小犬は嬉しげに尻尾を左右に振った。それにしても、この自転車道は人間ばかりか犬の散歩にも恰好の場所を提供しているのである。

新旧の東西の塔が夕空にそびえ、講堂を再建中の薬師寺を右手に見過ごしてしばらく下ると、朱色の橋がかかっている。その橋詰めの欄干に城戸橋と書かれていた。その橋の袂に一軒の茶屋があった。三人は休憩がてら、その店に入ってみることにした。暖簾をくぐり中に入ると、右手が小上がりで、左手が鉤形のカウンター席になっている。そこに陣取る。他に客はいない。左方西側は幅二間ほどの大きなガラス窓にしつらえてあり、そこから暮れなずむ夕景が望める。やや北よりに薬師寺の東塔と西塔が薄墨色の空に浮かびあがる。その背後に、南北に延びる生駒山の黒い影。その上空にたなびく横雲の間に夕日が橙色に輝いている。その光を背景に窓の外の桜の木が一本シルエットとして浮かぶ。このえも言えぬ夕景色を眺めながら飲む生ビールの味

はまた格別だ。

ちょっとした肴がほしいと言ったら、小鮎の佃煮、フキとワラビの煮物、イカの和え物を盛った皿がでた。昼間にこの店で出した大和路弁当の副菜だとか。これはちょっといただけない、と思ったが、口には出さなかった。カウンターの中の小柄な年配の女将と対照的に大柄な亭主を相手に談笑する。窓の上や周囲の壁には、この茶屋から見える景色を写した写真が数葉掲げてある。なかなかの技量だと感心すると、その写真の大半は女将が自分で撮ったものだとか。その写真の景色から亭主たちと客たちの間で、話題があちこちに変転飛躍する。信州の白馬山頂から眺めた御来光の美しさ、安曇野の天地山川の風光、上高地の焼岳を真っ赤に染めた夕日、ポルトガルの中部の小都市ナザレの高台から見た広漠たる大西洋、リスボンの東丘陵に建つサン・ジョルジェ城の夕景色、リスボン下町のレストランで食べた馬刀貝の白ワイン蒸し煮と亀の手、鳥羽のホテルのフランス料理、志摩半島の石鏡の新鮮な魚介類など、三人各自が自慢話を滔々と披露する。話の途中話柄を中断して、夕日が生駒山の山の端に沈む様子を凝視する。落日が沈んだ瞬間、時計を見ると、六時十五分。やがて茜色の夕焼けが西の空を染める。景色の美しさに談話が弾み、生ビールの他に燗酒を銚子二本、ざる蕎麦二人前注文し、それを三人で仲良く分かち合いながら賞味した。こうしてかれこれ一時間過ごした。お代は五千二百円。帰りがけ女将が渡してくれた名刺には、四季おりおり、季節料理西の京茶屋「まちぼうけ」奈良市六条町、と書かれていた。

茶屋を出て、あたりがすっかり暗くなった河畔の自転車道を南に下る。九条通りで右折し、西にむかって歩く。狭い通りなのに、ヘッドライトを点けた車が何台も往来する。その度に歩行者は、道路脇に立ち止まって車を避けなければならない。なぜこんな狭い道に車の通行を許すのか。歩行者の立場としては、ドライバーと行政の両方の無神経に腹が立つ。歩く、食べる、楽しむを実践する食通三人は、折角の愉快な気分を損なわれる気がした。これからの高齢者福祉社会は、少なくとも車優先社会であってはならないと思う。多少不便でも、自分の足で歩く、おいしいものを食べる、そして健康でゆとりのある人生を楽しむ、それこそが今後の老人社会のモットーとならなければならない、そう確信する。

近鉄橿原線の踏み切りの手前の道を左折し、二百メートルばかり下った所に、一軒の寿司屋がある。硝子戸を入って右手が、鉤手のカウンターで、男女二人の先客が坐っていた。三人はその先客の奥に陣取った。生ビール中ジョッキ一杯、日本酒二合徳利一本を注文。つきだしは、貝柱の酢味噌和え。それから一人は鰹のたたき、他の二人は握りすしを頼んだ。確かにネタは新鮮な方だが、なにせネタの種類が少ない。貝類はほとんどなく、トロも置いてない。仕方なく、アジ、マグロ、タイ、ウナギなどを握ってもらう。味は並の上といったところか。寿司をつまみ、酒杯を傾けながら、主人や隣のカップルと話をかわす。亭主は五十がらみの小柄なおやじ。訥弁ながら人はよさそう。隣のカップルは常連とみえて、亭主や女将との会話もどこか親密さが

感じられる。あれこれ雑談に華を咲かせていたが、頃合いを見計らって、三人は腰を挙げた。勘定はしめて七千円余。左手奥には座敷があり、そこの中央の大きな剣山にさした山ツツジが鮮やかピンク色の満開の花を咲かせていた。それを見て、ふと七言律詩を思い出した。

春宵一刻値千金　花有清香月有陰
歌管楼台人寂寂　鞦韆院落夜沈沈

三人は寿司屋を出て元来た道を引き返し、近鉄九条駅近くの小料理店「新ちゃん」に入る。先客三名カウンター席に坐っている。中年の男女のカップルと半袖姿の筋骨たくましい男性（後で聞けば、プロの競輪選手とか）。我々の注文は生ビール、ウーロン茶と梅干し入り焼酎。酒肴は小鉢の煮物、焼き鯖、メザシの三点。これらは残念ながら味の善し悪しを云々するほどの値段ではないし、またここはそうした店でもない。馴染みが気軽に飲み食いする場所だ。で早速また先客と雑談を始める。本当の酒飲みとは何か。当ては少量で専ら酒を飲む人間か、それとも副食物も同時に沢山食べながら飲む人間か。山嵐のような頭髪で黒々とした髭を生やした先客の中年男の曰く、もちろん食べながら飲み、飲みながら食べるのが本当の酒飲みだ、と。大村先生もその意見に同調して、さらに、それが健康にもよいからね、と付言する。では専ら酒を飲むのは、本当の酒飲みではないのだろうか。どうもそうとも言えない気がする。そもそもこの場合の修飾語「本当の」とは、どういうことなのだろうか。

そこでまたふとある逸話を思い出した。たしか『徒然草』か何かに出てくる話だ。北条某かが親しい身内の一人を呼んで、夜中に酒を飲み始める。ところがつまみがない。そこで台所に行ってさがす。どこかの棚の片隅に、小土器に残った味噌をみつける。それを肴に二人は心地よく酒を酌みかわす。ただそれだけの事だが、なぜか忘れ難い小話だ。つまり少量の味噌を肴に、幕府の二人の高官の武士が夜中に酒を酌み交わす。その際どんな佳話を語り合ったのだろうか。そしてそれが二人にとってどんな楽しい一夜となったことだろうか。それを思わず想像してみたくなるような余韻のある話だ。この場合、この二人の武士が本当の酒飲みではないとは言えないだろう。して見ると、副食物を沢山食べるのも、逆に肴が少量なのも基準にはならないのではないか。むしろ酒をいかに美味しく、かついかに楽しく飲むかが問題ではなかろうか。だがそこにも、また疑問符がつく。いつもただ美味しく楽しく酒を飲む人間など、はたしてこの世にいるのだろうか。されば杜甫やいかに、李白やいかに。彼らは苦い酒、悲しい酒、はたまた悲憤慷慨して、やけ酒を鯨飲しなかっただろうか。確かに、おいしい酒を楽しく飲むにしくはない。だが、人生は順風満帆とばかりはゆかない。挫折、紆余曲折はつきものだ。その折々に飲む酒の味も千差万別だろう。とすれば、本当の酒飲みとは何か、一概に定義しがたい。

とこう雑談しているうちに、また客が三人が入ってきた。若い男女

のカップルと中年女性。この店の常連と見えて、従業員や先客と親しげに言葉を交わす。ここはつまり気さくな常連がひいきにする気のおけない店ということだろう。九時少し前勘定をして、そこを出る。二千五百円。手頃な値段。我々三人はさらに近鉄を乗り継いで、新大宮まで戻った。そこでまた、さる料理屋の暖簾をくぐる。ほぼ満員だが、幸い座敷の一つ空いたばかりだった。そこに胡座をかいて、さらに燗酒を飲む。ただしご婦人の東山先生はうーろん茶。つまみは店が適当にみつくろって出す。

「いや、今日は愉快だ」と大村先生。

「春の名残を堪能するにはもってこいでしたね。場所も時刻も。こういう歩いて、そして食べたり飲んだりしながら、おしゃべりを楽しむというのはいいですね。これからも大いにやりましょうよ。奈良には歩くところは沢山あるんですから。例えば、柳生街道、暗峠越奈良街道、伊勢街道、山辺の道、竜田道など幾つもあります。それを一つ一つ踏破してみませんか」

「それは、いいね。やろう、やろう。僕も健康上の点でね、医者から言われているんですよ。毎日できれば、一万歩から二万歩歩きなさい、てね。ゴルフをすれば、それぐらいはクリアするんだけど。毎日ゴルフという訳にもいかないしね。毎日歩こうにも、適当な道がないんだよね。車がどんどん通るような道路はいやだし」

「そうですよね。僕もほとんど毎日ジョギングしているのですが、毎回同じコースでは飽きますね。だから時々違った道を走るんですよ」

「ああ、やっぱりね。今日の道も散歩には気に入ってるのだが、まだ色々と開発してみたいな、他にも」

「それじゃあ、私がそういうルートを少し捜してみましょうか。ちょっと心当たりがありますし。大和路を歩くとか、奈良の街道を歩くとか。そういう資料も手元に多少あると思いますから」と東山さんが助け舟をだした。

「それはいい。それは是非お願いしたいな。僕らはもっと歩かないといけない」

「歩くのは人間の運動の基本ですからね。歩けなくなったら悲惨ですよ。寝たきり老人なんか、本当に可愛そうですよ。床擦れができて、痛くてたまらないのに、自分一人では寝返りもできない。僕の母がそうでしたから、よく分かります。母は最後まで歩くことに執着しました。歩行訓練をしたがっていましたが、転んで頭をうつと危険だからという理由で、病院は歩行訓練をあまりさせませんでした。こう言ったら差別発言になるかもしれないけど、人間自分の足で歩けなくなったら、おしまいですよ。行きたいところにも行けない。したいこともできない。それじゃ生きている意味がない。死んだほうがましだ」

「それはちょっと言い過ぎだわ。世の中には寝た切りの人も、自分で自分の体を動かせない人も沢山いますからね」と東山さんが注意を促す。

「もちろんそうです。でもその人達も内心では自分の足で歩きたい

と切実に願っていると思いますよ、僕は。ただそれができないから、我慢しているのだと思います。確かに自分で動けなくなったら、生きている意味がないというのは、僕の独断と偏見です。もしそうなら、身体不自由の人は大半自殺してしまい、この世に存在しない筈ですから。だから人間はただ生きたい、死にたくないというのが本音でしょうね」

「そりゃ、そうだわ。それが何よりも根本ですよ。それは人間だけでなく、生あるものは全て存在し、存続することを欲し、それを維持するために、必死の努力をしているのですもの。種の保存も言わば、個の保存欲の結果なのですから。愛情もその反映ですわ」

「そう言われれば、その通りです。しかし僕のドイツの下宿のおばあちゃん、今はもう九十二歳ですがね、彼女は口癖のように言ってます、自分で動けなくなったら、死にたい、って。僕も同感で、僕も自分で動けなくなったら、死んだほうがましです。そもそも人間の自由とは何かと言えば、自分の手足で自分の意志を遂行できることだと思います。つまり自分の手足を自由に動かせることが、人間の自由の根本条件だ、僕は真剣にそう思う。だからこそ、僕自身普段から訓練しているのです。ジョギングをし、剣道をやり、できるだけ歩くように心掛けているのはそのためです」

「その努力は認めますよ。でもね、人間はどうなるか分からないものよ。だって先の事は誰にも分からないのだもの。いつ病気になるか、どんなに元気な人でも、ある日突然突発的なことが起きるかも知れない。例えば蜘蛛膜下出血とか脳血栓とか心筋梗塞とか、あるいは癌とか。病気だけでなく、交通事故だとか不慮の事故に突然巻き込まれる事だってあるでしょう。一寸先は闇なのだから。だから、あなただって、将来どうなるか分からないわよ。どんなに不死身だと自分で思っていても」

「確かに、それはそうです。先のことは誰も分からない。僕も明日死ぬかも知れない。それは不可抗力です。でも僕は生きている限り、自分に出来る努力を、自分の意志に従ってやって行こうと考えるのです」

少し自分の観念に執着する筆者は、いささか呂律が回らぬ調子で、続けた。

「実はですね、つい先日のことだけど、僕の教え子が沖縄から戻って来て、研究室を訪ねて来ました。彼女は定職が見つからず、沖縄でアルバイトをしながら暮らしているんです。その彼女が昼時に来たので昼飯を御馳走してやろうと思って大学の構内を歩いていると、ちょうど桜が満開だったのです。僕は単純に、桜が満開だねえ、と呟くと、彼女が突如、先生、私の心も満開です、と言ったんですよ。僕は一瞬彼女の言葉の意味が理解できなかった。すると彼女はにこやかな表情で、先生、私、今恋をしています。こんなうきうきした気持ちになったのは初めてです、と言い放った。僕は唖然として、どう対応してよいか分からなかった。何か複雑な気分でしたね。でも、表向き平静を装って、それは素晴らしい、恋こそ人生の花だからね、と答えたので

す。しかし彼女の横顔を見ながら、この娘の言葉を両親が聞いたら、特に父親が聞いたら、どんな気持ちになるだろうかと考えましたよ」

「それで、彼女は何と言ったの」

「それきり何も言いません。僕もそれ以上深く立ち入りしたくなかったから。でも彼女のいかにも楽しそうな様子を見ていたら、僕の杞憂は無用だと思いましたね。恋する人に出会えることは、彼女にとって幸福そのものなんですから。祝福すべきことです」

「それはそうよ。恋愛をして初めて、人は自分に目覚め、人生の意味を自覚するようになるのですもの」

「結局人間は恋愛によってしか、人生の意味や自分の価値が分からないのですかね」

「そういうことですわ。でも愛情は何も恋愛だけにはかぎりませんよ。人事万端、愛情がなければ何もできません。教育もそうでしょ。学生に対する愛情がなければ、学生は私達から何も学ばないわ」

「確かにそうだ。料理も同じで、愛情のない料理は、見栄えがどんなによくても美味くないからね」と大村先生。

こうして愛情談義の内に、春の一夜がふけて行ったのである。

四　吉野の鮎鮓

梅雨の晴れ間の一日、吉野の鮎鮨を食べにでかけた。自称グルメ三人が西大寺駅に会して特急に乗り、吉野下市駅に到着したのが昼下がりの一時半。駅前から南に向かってそぞろ歩き、吉野川を渡り、千石橋の南詰めに佇む。鮨屋の予約した時間は三時。それまでまだたっぷり待ち時間がある。さてこれからどうやって暇つぶしをしたものか。我々三人のいずれもこの地は初めてで土地勘がない。思案したあげく、電話で駅前のタクシーを呼ぶ。すぐにやって来たタクシーに乗り込み、運転手と相談する。界隈の見るべき場所は願行寺と立興寺の二寺と「いがみの権太」の墓ぐらいだとのこと。それではその三つを見て廻ろうと意見が一致。先ず願行寺に行く。かなり大きな寺だが、境内には人影はない。日差しが強いので、本堂の縁側に坐してしばし休憩。次に立興寺に廻って拝観した後、吉野川の南岸を東へ一キロほどタクシーを走らす。ある民家の傍らに古びた小さい石碑があった。それが義経千本桜に出てくる「いがみの権太」の墓だそうな。早速墓前に屈んで合掌。まだ時間があるので、タクシーを近傍に待たせて、吉野川の水辺に降りる。前日の雨で増水した川は濁っていて流れも速い。それでも対岸には鮎釣りの太公望が数人長い竿を川面に伸ばしている。手前の岸近くの浅瀬には鴨が二羽のんびり泳いでいる。その十メートル程下流には青鷺が一羽長い首を垂直に立て、水中の獲物を物色している。にわか風狂の遊子三人は吉野川の上流と下流を眺望しながら、うたた歴史の今昔に思いを馳せた。万葉集に詠まれた吉野川の歌は数多い。その中でも次の三つは忘れ難い。

古の賢しき人の遊びけむ吉野の河原見れど飽かぬかも

あかねさす日並べなくに我が恋は吉野の川の霧に立ちつつ

もののふの八十氏人も吉野川絶ゆることなく仕へつつ見む

待たせていたタクシーに戻り、再び元来た道を引き返す。新緑の樹木の間や田畑の土手のあちこちに紫陽花の群落が散見し、白、青、赤紫の花が今を盛りと咲いている。周辺の田圃の早苗とともに初夏の景観に爽やかな彩りを添えている。紫陽花の歌は万葉集には二首あるが、左大臣橘諸兄卿の歌が麗しい。

あじさゐの八重咲くごとく八代にをいませわが背子見つつしのはむ

午後三時前、お目当ての店の玄関前でタクシーを降りる。昔風の忍び返しをつけた黒板塀に紅殻の壁の広壮な邸宅、これぞ名代の鈎瓶鮓本家「弥助」だ。和服姿の仲居さんに案内され二階の八畳の間に入る。三人大きな応接台を囲んで坐る。上座に小さな床の間がしつらえてあり、白と紫色の杜若を生けた花瓶が置かれ、その上の一幅の掛け軸には、金太郎のようなむっちりとした可愛い稚児の遊び興じる姿が描かれている。間もなく中年の仲居さんがおしぼりを持って来て、飲み物は何になさいますか、と尋ねるので、とりあえずビールを注文した。突出しに枝豆と虎杖の和え物が出た。それから程よい間合いで料理が次々と運ばれて来た。まさに鮎尽くしの態である。以下に具体的な内容を、大村先生のメモから借用する。

「吉野川の鮎は桜の花びらを食べるので桜鮎とも呼ばれ、味がよいと云われる。創業以来八百有余年の『弥助』は四十八代目の店主で、裏の庭園は苔むした奇岩と石橋が昔の栄華を偲ばせる。鈎瓶鮨とは、鈎瓶形曲桶に漬けて、なれ鮨をつくったことに由来するが、今はもうそうした腕利きの職人がおらず、残念ながら昔のままのものは味わうことが出来ない。しかし現在も天然の鮎の味は絶品で、充分満足することができる。メニューは次の通り。空揚げ鮎のあんかけ。鮎の刺し身。鮎の塩焼き。貝柱と葉唐辛子にジャコとタコの大根おろしの添え物。鮎の味噌だき。鮎の田舎だき（ニラとネギの汁をかけたもの）。鮎の押し寿司。そして吸い物」

ビールの後で、さらに地酒を注文。かくして美酒美肴に酔いしれ、かてて怡々たる談笑の楽しみも満喫した。食後の腹ごなしに、裏山の回遊庭園を散策した。山の斜面の細い道を登る。庭園内には、「維盛塚」、「お里黒髪塚」、吉川英治の句碑などが点在する。木立の間のやや開けた見晴らし場から、北の山峡に飛鳥のなだらかな山並みが遠望される。古来幾多の人々がこの谷間を往来したことだろう。万葉の歌人達、西行上人、平維盛、源義経、後醍醐天皇の忠臣達、さらに芭蕉、蕪村、本居宣長など数々の文人墨客達。眼下の家々の屋根に照り返す強い日差しに些かめまいを覚えながらも、美味を堪能し、古式庭園を逍遥し、剰え歴史を今に実感しえる幸せをしみじみとかみしめた。

名代の弥助鮓を後にした遊子三人はいささか満腹の態で、ぶらぶらと界隈の風景を楽しみながら下市駅まで歩いた。既に五時をまわって

いるが、日はまだ高く、汗がにじむほど暑い。平日のせいか、乗った急行はがら空き状態でゆったりと坐れ、しかも冷房がきいていて涼しい。終点の吉野のホームに降りたのはわずか数名の客だけ。駅前の広場は閑散として、辺りの土産店や食堂ももう店じまいをしかけている。小さなロープウェイで上に昇る。黒門から道の両側に土産店や食堂や旅館が櫛比する通りも人影はまばらである。人と車でごった返していた桜の盛りの頃を思うと、まるで嘘みたいだ。梅雨は吉野のオフシーズンなのだろうか。途中で金峰山寺の蔵王堂を右手に見過ごし、東南院、大日寺、勝手神社を経て、中千本の竹林院にたどりついたのが夕刻の六時半過ぎ。豪壮な山門をくぐると、右手に正面玄関がある。唐破風のいかにも古い格式ある寺院の表玄関といった趣だ。広い式台の前で靴を脱ぐと、出迎えの和服姿の仲居さんがフロントで鍵をもらって、部屋まで案内してくれる。裏手新館の一七五号と一七六号室。男性二人の部屋は十二畳と五畳の二間に洗面所とバス、トイレ付き。

浴衣に着替えて、地下の大浴場に降りる。浴客は老人が数人。かく言う我らも既に初老の馬齢なのに、自分ではまだ少壮の気概でいるから可笑しい。昔少年の頃番長を張っていたことだけが共通点で、体格も年齢も経歴も全く異なる二人だが、なぜか気が合うから傑作だ。湯船にゆったり浸かりながら、昼間の鮎尽くしの料理の味を反芻する。

「いや、あれは中々のものですな。僕がこれまで食した中では五指に入る」

「僕もこれまで、鮎の背越しや塩焼きは何度か食べましたが、あんな鮎尽くしは初めてです。しかし美味いものですね、鮎は。あれは全部天然でしょうね」

「勿論、そうでしょう。姿が流線形で、身がしまっていたからね。それに養殖ものは大味で、あんな妙味はない」

「結局、天然自然のものが一番美味いということですね」

「そういうことだね。ただしその天然の素材を最もよく生かす料理の腕と知恵も大事だけどね。新鮮な素材、そして工夫と技量。この三つが総合されて初めて、真の美味しい料理が生まれる。それはどこの国でも同じです」

入浴後、浴衣半纏姿で表の旧館に行く。寺の庫裏のようなたたずまいの和室の三方を、大和絵風の樹木と花鳥を描いた大きな襖で仕切っていて、一間の大きさは八畳である。障子戸の入口は広い廊下を隔てて、枯山水の庭園に面している。部屋では大きな座敷用テーブルの上に、夕食の料理が既に並べられていた。枝豆、マグロとタイの刺身、小鉢の酢物、朴葉味噌煮、鮎の塩焼き、アマゴの甘露煮、ゴマ豆腐など十品目。飲物は別途にビールと吟醸酒を注文。見映えは整然として一見豪華だが、味の方は今一だ。お腹があまり空いていないせいもあろうが、昼間の鮎尽くしの料理と比較すると、あらゆる点で見劣りがするのは如何ともしがたい。食欲をそそられるような物がないので、ついビールと酒に偏りがちになる。昼も夜も美味しいものを食べようというのが、土台間違っているのかもしれない。美食はせいぜい一日に一回がいいところか。それにしても昔の王侯貴族の健啖ぶりは一体

どこからきたのだろうか。

翌朝早く目覚め、軽い運動をして入浴。八時から朝食。昨夜と同じ表の和室で、献立は生卵、焼き魚、とろろ汁、お浸し、海苔、漬物、味噌汁など八品。僅か一日なのに、上げ膳据え膳が何だか億劫になり、家での平凡な料理が恋しくなる。生来の貧乏根性のなせる業か。朝食後、コーヒーを飲みながら新聞を読む。世間は世紀末を迎えて、色々と多事多難の様相。我ら閑人は今日の予定を相談するに忙しい。

フロントの会計で支払いを済ませてから、庭園「群芳園」を見学する。大和三名園の一つとか。小さな島や岩を配した池泉の周囲には様々な樹木や草花が植栽されている。池の辺を回遊し、南側の小高い丘に登る。好天の日ならば、さぞ素晴らしい眺望だろうが、今日は生憎の雨模様で、四囲の山々には雨雲が低く垂れ込めていて、見晴らしがよくないのが残念である。丘の一隅に小さなお堂がある。この寺の中興の祖、日蔵上人のお像を安置しているとか。そのお堂の前で合掌拝礼して、庭園を出る。宿坊の職員に手配してもらったタクシーに乗り込み、山門を出て北上、勝手神社の脇の道を通って西吉野に向かう。霧雨の降りしきる山中を右左に蛇行しながら走行すること一時間、ようやく天川村に着く。タクシーを待たせて、桧柱の真新しい社殿の大弁財天社に参拝。内陣には神主と巫女にお祓いをしてもらっている子供連れの家族の姿が見えた。この雨の中奇特なことだ。我らはすぐタクシーに戻り、さらに南下して洞川まで行く。洞川観光案内所の前で下車。タクシー料金、チップも含めて一万二千円なり。

周辺を徘徊して、適当な店を物色する。正午過ぎ、洞川温泉前のある食堂に入る。昼食に何を食べるか。お品書を吟味する。鮎塩焼き七百円、アマゴ塩焼き六百五十円、鹿刺し六百五十円、冷奴三百円、茶粥定食（柿の葉すし付き）千三百円、奴定食千百円、湯豆腐定食千二百円、しめじご飯六百円、しめじご飯定食八百五十円、アマゴ定食千三百円、ザルソバ六百円、ソウメン五百五十円、しめじうどん六百円、きつねうどん六百円、そしてビール大瓶六百五十円、お酒四百五十円。この中から単品として冷奴、鮎塩焼き、アマゴ塩焼き、鹿刺し、ビールを注文。その中で鹿刺しが一番美味。一軒だけでは味が分からないと、また別の店に行き同じ品を注文して、結果は裏目。洞川の豆腐が美味いと聞いてはるばる来たが、期待外れ。それでも一応、家苞に豆腐を買って帰ることにした。南無三宝。

五　南紀の美味探訪

晩秋のある日の午前十時十分。大阪天王寺駅十六番ホーム。男女四人、全員時間厳守。互いに朝の挨拶を交わす。間もなくホームに十時二十分発特急「黒潮七号」が到着し、早速指定車に乗り込む。車内は比較的空いているので、女性陣と男性陣はばらばらに坐る。進行方向の右手が大阪湾、そして紀伊水道と続く。幸い天気が良いので、窓からの眺めが楽しめる。青く澄み切った秋空の下、静かに凪いだ海面がまぶしいほど輝いている。ところが列車の通過する場所によって海の色が微妙に変わる。その風光に見とれながら、時々向かい同士で雑談

をする。正午近く、御坊を過ぎた辺りで、ワゴンを押してきた車内販売から「雀鯛寿司」の折り詰めと缶ビールを買い求めて、おしゃべりがてら昼食をする。食後しばしうたた寝。

特急列車は定刻通り午後一時五十四分、紀伊勝浦駅に着いた。改札口には二人の中年男性が我々を出迎えてくれた。いずれも東山さんの知人で、今日の我々の案内人である。駅前に停めていた六人乗りのワゴン車に乗り込む。とりあえず今夜の宿に直行する。勝浦湾に面したホテル「越之湯」、その五階の三つの部屋が予約してあった。荷物をそれぞれの部屋に置いて、すぐに外出。行き先は、熊野本宮大社。国道四二号線を北東へ十数キロ、新宮市内の高校前で左折し、熊野川沿いの国道一六八号線を北上すること凡そ一時間で、目当ての本宮。駐車場にワゴン車を停めて、歩いて百五十八段の石段を登る。両側は杉木立が亭々と聳えている。手前に八咫烏の大きな幟が立ち、白地に黒の菊の御紋二つ染め抜いた幌が張られ、その上にしめ縄を張り渡した神門をくぐると、玉砂利を敷き詰めた境内に四つの社殿が南面して立っている。左手から第一殿、第二殿、第三殿、第四殿と並ぶ。周囲は鬱蒼とした古杉の森に囲まれている。左から順次参拝する。西御前は伊邪那美命を祀り、中御前は伊邪那岐命を祀り、証誠殿は須佐之男命を祀り、一番右手の第四殿は天照大御神を祀るという。社殿はいずれも古来の権現造り、柿葺きの屋根で、屋根の上の千木と勝男木は木口に金色の金具が被されている。その金色が古色蒼然たる茶褐色の屋根と鮮やかな対照を見せ、そしてそれがこれらの社殿に神々しさを与えている。神道の神々を祀る本宮大社は熊野三山の中心であり、昔は音無川と熊野川の合流する地点の中洲、大斎原にあった。それが明治二十二年（一八八九）の大洪水で社殿の多くが流されたらしい。昔の本宮大社はもっと豪華壮大なもので、社殿の数も規模も今日のものよりはるかに大きなものだったらしい。その復元図が参道脇の掲示板に描かれていた。

本宮参拝後、近くの祓戸王子を参観する。熊野古道の数ある王子の中の一つで、中辺路の終点でもある。この一つ先が三キロ程離れた伏拝王子で、そこから本宮が遠くに見下ろされる。平安時代に和泉式部がはるばる京都からやって来たが、丁度月の障りとなり、止む無く本宮参拝を断念して詠んだのが次の歌。

晴れやらぬ身の浮雲のたなびきて月のさはりとなるぞ悲しき

式部がそこから本宮を遥かに伏し拝んだので、伏拝の名がついたらしい。今もそこには式部の供養塔が立っている。ちなみに熊野詣が盛んになったのも平安時代のことである。最初が宇多上皇で、次が花山法皇、それから皇族、貴族のみならず一般庶民にまで熊野三山巡りが流行し始めた。これを世に「蟻の熊野詣」という。延喜七年（九〇七）から嘉元元年（一三〇三）までの凡そ四百年間に、二十三人の法皇、上皇が都合百四十回熊野御幸をされている。その中でも平安末期の白河上皇が十二回、鳥羽上皇が二十一回、後白河法皇が三十四回、後鳥

羽上皇が二十八回と圧倒的に多い。とりわけ後鳥羽上皇は在位二十四年間にだから、十カ月に一回熊野詣をした勘定になる。京都から片道凡そ三百五十キロ、その往復には最低二十日以上かかる大旅行である。それも並の旅程ではない。自分の足で歩いたことのある人なら、それがどれほど凄いことか想像つくだろう。試しに滝尻王子から本宮まで、あるいは本宮から那智大社まで歩いて見るとよい。その難路の程が実感できるに違いない。あの百人一首の藤原定家が建仁元年（一二〇一）に後鳥羽上皇の熊野詣に随行した時の体験を、『後鳥羽院熊野御幸記』に記している。時に不惑四十歳の定家が余りの難路に悲鳴を漏らしている。「祈るところは、只生死を出離し、臨終の正念なり」と。後鳥羽上皇は後に北条氏の専横する鎌倉幕府を倒さんとして失敗し、四十二歳で隠岐に流され、遠島の孤絶孤独の中で崩御された。後鳥羽院はその高貴な御心の中に、若き日からの年毎の熊野詣をどのように回顧されたのであろうか。院の御製、

人もをし人もうらめし味けなく世を思ふゆゑにもの思ふ身は
奥山のおどろの下もふみわけて道ある世ぞと人にしらせむ
われこそは新島もりよおきの海の荒き波風こころしてふけ

帰路は岩田川沿いの道を通り、湯ノ峰温泉、渡瀬温泉を経て、大塔川沿いの川湯温泉を窓越しに眺め、請川から再び国道一六八号線に出て南下し、新宮経由で那智勝浦まで戻った。時刻は六時をまわり、辺りはすっかり暗くなった。案内人の方が予約していてくれた寿司屋「八雲」の暖簾をくぐる。入口右手の小上がりには、既に六人分の膳が用意されていた。生ビールで先ずは乾杯。この夜のメニューを以下に列記する。

熊野川でとれた天然鮎の塩焼き、刺身の盛合わせの大皿（大トロ、マグロ、ヒラメ、ハマチ）。それを平らげた後で、アカガイ、アワビ、ウニ、クジラの盛合わせを追加注文。それが片付くと、付台に乗った握り鮨（トロ、マグロ、クルマエビ、アナゴ、ウニ、イクラ、イカ）が各自に廻る。生ビールの後は地酒（太平洋という名前）を数本。最後に鯛のアラとアサツキ入りの赤だしが出た。新鮮な材料、巧みな手捌き、迅速な仕上がり、すべてに非の打ち所が無かった。それに店の人々（親子夫婦四人）の応対も明るくきびきびして申し分ない。さすがは南紀で有数の寿司屋だけのことはあると、皆が納得したことである。

翌朝五時過ぎに目覚めた。起床するにはまだ早いので、持参していた審査論文を取り出して読む。いずれもプラトンに関するもので、『カリクレスと知』、『徳概念の要請』、『技術・言葉・こころ』の三点である。手帳に評価を記入。七時に一階の岩風呂に降りる。窓の外を見ると、激しい風雨で視界がきかない。昨日とは打って変わった天候。朝湯にゆっくり浸かった後、八時半から隣室の東山さんの部屋に集い朝食。鮭の塩焼き、生卵、蒲鉾、海苔、梅干し、沢庵、味噌汁と平凡な内容。味も今ひとつ。もう少し工夫が出来ないものかと思う。九時

半、フロントに降りて支払いを済ます。夕食は取らず宿泊と朝食だけなのに、意外な高額に驚く。

昨日の案内人の両氏が再び自家用車でホテルの前で出迎え。雨模様で、予定していた磯釣りに出られないからとのこと。どこに行くかしばし思案した揚げ句、昨日熊野本宮大社を参拝したのだから、新宮の熊野速玉大社にも参詣しようと衆議一決。かくて一路新宮へ。と言っても所要時間十五分足らずで到着。駐車場に車を駐車。幸い雨は止んで、傘をさす必要はなくなった。駐車場の横の参道脇に国の天然記念物と立て札があり、木枠で囲いをした椰の大木がある。由緒書きによれば、平清盛の長男、平重盛の手植えだという。すると平治の乱の起こった平治元年（一一五九）清盛の熊野参詣の折に植えたのであろうか。それなら樹齢千年と記すのはいささか合点が行かない気もする。しかし幹の周囲六メートル、高さ二十メートル余という巨木はどこか神秘的で、霊木の名に値する。神門を入ると玉砂利の広い境内に朱塗りの鮮やかな社殿が並ぶ。屋根は本宮大社と違って銅板葺きで、その緑青色が柱や軒や切妻破風の朱色と著しい対象美をなしている。いささか華麗にすぎるとも思えるたたずまいだ。参拝後、屋根を見ていて疑問に感じたことがある。社殿の棟の勝雄木がここはどうして五本なのか。確か本宮大社は四本だった。それと、社殿によって千木の先端の切断面が水平と垂直に分かれているのは何故か。境内を通りがかった白装束の年配の神官に尋ねてみた。しかし彼もさあと首を傾げ、どうしてですかな、分かりませんな、昔からあのようになっておるのですから、と頼りない返事。推測するに、男神を祀るか、女神を祀るかの識別のためであろうか。

速玉大社を参観した後、市内横町にある「東宝茶屋」に立ち寄る。紀州名産本馴れ鮓本舗だそうだ。カウンターに坐り、鮎、秋刀魚、鯖の馴れ鮓一尾ずつを皆で試食する。いずれも一年ものだが、なかなかの味。特に鮎が気に入った。この店の自慢は、三十年ものの秋刀魚の馴れ鮓とか。三十年も寝かせた秋刀魚の馴れ鮓がどんなものか。ちょっと食指が動いたが、百グラム五千円と聞いて辟易。匂いは果物のような香りで、米も秋刀魚もどろどろに溶けて、淡い酸味のヨーグルトの感じだが、よく味わうと幾種類もの複雑な旨味が滲み出てくる、とは主人の口上。案内人の二人は家への土産として一年ものを何尾か買い込んだが、我々はまだ旅の途中なので購入せず。電話で注文すれば、全国どこでも宅配してくれるそうな。

正午過ぎに再び勝浦に戻り、駅近くの食堂で昼食をとる。マグロ定食、カツオ定食、鯨の尾身、カツオの刺し身、珍味マグロの目玉と胃袋を二皿ずつ頼み、皆で分け合う。この店は六十搦みの夫婦二人でやっているが、安くて美味いのでよく流行っている。おまけに旦那は料理に忙しく無口だが、女将の親切なのが嬉しい。これぞ食べ物商売の極意ではなかろうか。アサリ貝の味噌汁も美味いし、サービスで出してくれた高菜浸けもご飯の仕上げにもってこいだった。という訳で一同満足して午餐を終えた。

昼食後、那智の駅前まで車で送ってもらい、そこで案内人と別れた。

道路を渡ると、五十メートル先に、浜の宮神社がある。小さな鳥居が立ち、低い玉垣で囲われた境内の入口の右手に、楠の大木が枝葉を広げている。間口三間、勝雄木四本を棟に乗せた鄙びた社殿が杉木立を背にして建っている。江戸時代の再建らしい。型通りの拝礼を済ましてから、隣接の補陀洛山寺に行く。由緒ある古刹だそうだが、現在の本堂は平成二年に再建されたもので、まだ新しい感じだ。靴を脱いで木の階段を六段上がり、高床宝形の内陣に入る。内部はまだ桧の香りがするほどの真新しい造作だ。正面祭壇の奥の一段高い所に、御本尊の十一面千手観音菩薩像が安置されているらしいが、その前は頑丈な鋼鉄製の扉で遮断されていて全く見えない。秘仏なのか。左手の納経所に坐っている堂守の中年男性に話しかけた。

「こちらの御本尊は、拝ませていただけないでしょうか」

「それが、普段は開帳してないのです。一年の内でも特別の日にしかお見せしてないのですよ。皆さんはどちらからお出でですか」

「奈良から来ました」

「ああ、奈良から。それはそれは・・・」

「確かここには馬頭観音があると伺ったのですが」

「よくご存じですね。あれはしかしもうここにはありません」

「修理か、何かに出されているのですか」

「いや、そうではなくて、紛失したのです」

「紛失?」

「そうです。いつか誰かが秘密に持ち出したらしいのですよ」

「ええっ、それじゃ盗難じゃないですか。警察に届けたのですか」

「それが、この本堂が再建される前でしてね。その当時はこの寺は荒れ果てたままで、誰もいない無住寺だったのです。それで馬頭観音もいつの間にか行方不明になったような訳でして」

「残念ですねえ。あれは国宝級の一品だったのに」

「実は、あの観音さまは現在アメリカにあるそうですよ」

「アメリカ?すると誰かが盗み出して、それが闇の手にわたり、結局アメリカに売り飛ばされたんだ。けしからん話だ」

「全く、おっしゃる通りです」と堂守さんも同調する。あれこれ話している内に、彼は引き出しから鍵を取り出して、

「せっかくお出でになったのですから、特別に」と言って、祭壇の後ろ手に行き、唐門風の収納庫の施錠を外し、大きな鋼鉄の扉を開いた。中から、高さ凡そ六尺余の香木造りの立像が忽然姿を現した。これぞ御本尊こと、三貌十一面千手千眼観世音菩薩である。褐色の艶やかな色合いのお姿。光背も同じ香木らしく飴色の光沢をしている。聞けば、数年前に文化財研究所で修復されて戻られたのだそうである。我々は代わるがわる御本尊の前に立ち恭しく合掌した。脇侍の広目天像、持国天像の両像も平安時代のものだとか。堂守さんの説明では、見る角度によって御本尊の表情が変わるらしい。確かに方角によってお顔の表情が変化する。大村夫人は、二歳のお孫さんの顔に似ていると感激の態。我々一同場所を変えてはためつすがめつ見た。なるほど見様によって、色々な相好を呈する。多分に見る人の愛する者に似て

映ずるらしい。この観音さまの霊力であろうか。

重要文化財の観音像の特別の開扉に対して、我々はなにがしかの喜捨をして、お寺を辞した。それから那智川沿いの道を北に向かって歩いた。時折車が通る以外は人影はほとんどない。曇天だが、次第に明るくなり、天候が回復しそうな様子である。谷あいのそこかしこに点在する農家の庭に、たわわに実る柿の木や蜜柑の木が多々目につく。路傍には色々な秋の草花が咲き乱れている。コスモス、ナデシコ、オミナエシ、鶏頭、野菊、ススキなど。旧道沿いの家々の生垣には白や淡紅色の山茶花が咲き初めている。もう晩秋の時節だが、南紀は暖かいので、まだこれだけ色とりどりの花々が見られるのだろう。それにしても路傍の花は最高の芸術家だと実感する。

凡そ一時間ほど歩いた所で、右手に小さな森が見えた。そこに近づくと、旧道に面して「熊野道」と彫った石柱が立っていた。左側に黒ずんだ石碑があり、それに「王子碑」と深く陰刻されていた。市野々王子跡である。小さな鳥居をくぐり、参道を二十メートル程進むと小川があり、小橋を渡ると、低い石垣に囲まれた小さな境内の奥に、こじんまりとした檜皮葺きの社殿があった。参拝したあと、境内の古い丸太や石に腰掛けて休憩。持参のミカンと寺でもらった茶飴を食べる。

「あと、まだだいぶあるの」と東山さんが問う。

「そうですね、もう一時間ばかりはあるかな」

「ええっ、まだそんなに歩くの」と大村夫人が嘆声を漏らす。

「熊野古道は自分の足で歩いてこそ意味があるんです。歩くことはすべての基本ですからね。歩けば健康にも良いし、何より歩いたあとの食事がおいしい」

「そりゃ、そうだ。昨日は全然歩いてないから、今日は少しは多めに歩かなくてはいかん。少なくとも那智大社までは踏破しなくっちゃ」と大村先生。

「その意気、その意気」と囃すと、女性陣はただ黙然と苦笑するばかり。

かれこれ半時間休んで、ようやく一同は腰を上げた。それから黙々と歩き続けること三十分。那智川にかかる小さな二の瀬橋を渡り、道路を横切って、いよいよ大門坂の入口にたどりつく。坂道を少し上ると鳥居が立ち、それをくぐると、朱色の欄干の振ケ瀬橋。ここからが那智山への旧参道、幅一間余の大小の石を敷き詰めた登りの坂道が延々と続く。石畳の両側には杉の巨木が屹立し、鬱然たる樹陰で辺りが薄暗くなる。最初の左右の大木は樹齢八百年、幹回り八メートル、樹高三十数メートルの夫婦杉で、それを皮切りに古木二百本の杉並木が天を摩する。転ばないように、苔蒸した石畳と石段を一歩一歩踏み締めながら登る。やがてしめ縄を張った大きな自然石の石碑が右手に現れる。「多富気王子社跡」と刻まれている。熊野古道九十九王子の最後の王子があった所だ。この石碑の右脇には楠の大木が聳え立つ。ここからさらに五丁程登ると、右手の樹木が突如途絶えて、豁然と眺望が開ける。ここは昔の十一文関所跡。遥か東前方に原生林に覆われ

た那智山の山並み、その手前のそそりたつ絶壁に白い瀑布が遠望される。飛竜直下三千尺、これぞ那智の大滝。何と素晴らしい眺めだ。一同その場に凝然として立ち尽くし、しばしその絶景に見とれる。はるばる歩いて登って来た甲斐があった。この眺めを味わえる有難さ。これは偏に辛抱して歩いたお陰だ。ただ感謝あるのみ。

ようやく大門坂を登り切り、曲がりくねった舗装道路を登り、バス駐車場を横切って東に進むと、左手に那智大社参道登口がある。急勾配の長い石段を見上げた三人は驚愕して立ち止まった。

「もう、終わりかと思ったら、まだこんな坂を登るの」と嘆息する女性達。いかにも疲労の色ありあり。そして恨めしげな目付きで先導者を睨む。

「なんなら、ここから引き返しますか。でも、もうバスは無いから、また歩いて下るしかありませんよ」と先達はそっけない返事。それを聞いて三人は観念したのか、渋々先達の後に従う。確かに初心者にはきつい道だ。しかし苦あればこそ楽あり、と励まし励まし石段を登る。那智大社参拝は明日に廻して、五時に予約した寺の宿坊に入る。東側奥の大部屋二間。置火燵がしてある。南の縁側の東向きの窓から、夕暮れの薄明の中に朱塗りの三重塔と滝の瀑布が見える。一瞬、自分の眼を疑った。窓に張られた大きな写真かと思った。だが眼の錯覚ではなく、正真正銘の実物だった。しかし恰も大きな額縁に収まった名画の趣である。この自然の名画は眼福を肥やすばかりでなく、心の美味、滋養である。我々は肉体の疲労を忘却し、幽邃の桃源郷に導かれるような至福を感じる。明日は那智大社に参拝して、あの自然の飛瀑を仰ぎ見るのだ。八百有余年の昔、西行上人がこの地で修行された折りに詠まれた歌を思い浮かべながら、上人の御心を偲ぶよすがとしよう。

あらたなる熊野詣のしるしをば氷の垢離に得べきなりけり

木のもとにすみけるあとを見つるかな那智の高嶺の花を尋ねて

雲消ゆる那智の高嶺に月たけて光をぬける滝の白糸

（以上文責　堤　博美）

Tourism and excellent Cuisines

Kyohichi OHMURA and Hiromi TSUTSUMI

Summary

The reason why there are not many great restaurants in Nara is a psychological condition we call DAIBUTSU Sho-Ho. Nara's magnificent tourist attraction is the greatest Buddhist statue in all of Japan, so the shopowners feel no compelling need to attract customers. However, the traditional attitude of searching out delicacies of the ancient Nara still remains in the mind of people living inNara, we shall continue to make efforts to find good restaurants in the future.